

報 告

野外活動における情報通信機器の可能性

— 埼玉カブラリーにおける情報機器利用報告と今後の展開 —

Outdoor Recreation Communication System

Saitama Cub Rally Test-run and Further Development for Future Use

黒 澤 岳 博*

KUROSAWA, Takehiro

はじめに

2005年5月15日、ボーイスカウト埼玉県連盟に所属する2,000人のカブスカウト^①が参加する第8回埼玉カブラリーが熊谷スポーツ文化公園で開催された。筆者は、この大会の準備委員及び実行委員として前年9月の企画段階から参加し、活動本部副本部長として、事前の広報及びプログラムを統括する立場であった。

この大会の準備を進めていく中で、運営上の課題として、「事前の情報共有」「当日の場内情報提供」「当日及び事後の広報」が考えられたが、これらを解決する手段として、携帯電話など情報通信機器及びインターネットツールの活用の効果があると思われたため、準備段階から導入することとなった。

本稿では、この大会で使われた携帯電話などによるインターネットツールの利用方法等を報告することにより、野外活動における情報通信機器の利用について検討したい。

1. 埼玉カブラリーの概要

第8回埼玉カブラリーは、平成17年5月15日(日)、国体メイン会場として設置された埼玉県熊谷スポーツ文化公園^②で開催された。この公園は99.7haと大変広く、本大会では、熊谷ドームで開・閉会式、芝生広場・投てき場でプログラムを行う形で、広い公園の一部を利用することとなった。

参加者は、プログラムの対象となるカブスカウトが2,037人、そのカブスカウト達を引率する各

* 城西大学経営学部非常勤講師



写真 会場概観

隊指導者 909 人，運営スタッフ 243 人の合計 3,358 人であった。

今回のカブラリーにおいては，テーマを「スカウト 100 年ものごたり ― ともだち 2,000 人できるかな ―」と定め，2007 年のボーイスカウト運動 100 周年を祝うと共に，カブスカウト同士の交流が広がるようなプログラムを展開することとした。これにより，多数のカブスカウトが集う行事の楽しさと，協力することの大切さを体験できるようなプログラムを企画することとなった。また，年代の限られたカブスカウトだけが参加することから，カブスカウトが通常地元で行う活動に即した「信仰とたしなみ」「健康と安全」「技能と野外活動」「社会生活」の 4 つのテーマをプログラム設定上のブロック別テーマとした。会場として利用した芝生広場・投てき場はそれぞれほぼ陸上競技場 400 メートルトラック内と同じくらい大きさであり（写真），それぞれを 2 つに分け，プログラム運営上のブロックとした。

各ブロックでは，カブスカウトが数人の組になって協力しながらプログラムに参加し，大会終了後，各隊隊長が体験した項目を確認できるようなプログラムにするものとした。これにより，大会が日常の各地での集会につながるよう期待するものであった。

2. 大会運営上の課題

「はじめに」で述べたように、大会運営上の課題として「事前の情報共有」「当日の場内情報提供」「当日及び事後の広報」の3つがあげられた。これは次のような状況によるものであった。

2-1 事前の情報共有

これまでの大会においては、会議における報告のみが事前の情報共有方法であった。

ボーイスカウト埼玉県連盟⁽³⁾では、県内を16地区に分けそれぞれ5~15個団が所属するヒエラルヒー構造になっており、それぞれ月に1回会議が開催されている。県連盟全体の意志決定をする県連盟理事会での報告・決議事項は、各地区委員会を経て、各団・各隊に降りてくる。

第6回までの記録をみても、県連盟の行事については、基本的にはすべて毎月の各理事会において報告されて初めて公式な情報となり、これらは全て「紙」による情報共有に依存していた。つまり、情報が共有されるタイミングは、月に1回となっていた。

第7回（2002年開催）については、毎月1回開催される県連盟理事会において、実行委員会が発表した情報を、県連盟公式WEBサイトに掲載した。これは、筆者が当時、県連盟公式WEBサイト⁽⁴⁾を管理するため、理事会にオブザーバー参加を許されていたことによるもので、実行委員会として意図したものではなかった。理事会の情報を地区委員会を経ることなく情報提供したことで、多少の時間的ショートカットが可能となったが、毎月の理事会の会議にあわせて情報提供をせざるを得ないことには変わりなかった。

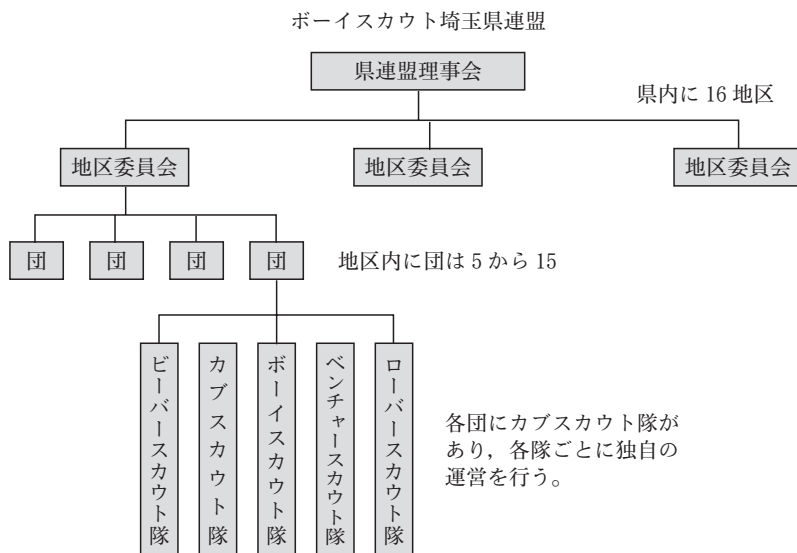


図1 ボーイスカウト埼玉県連盟の組織概要

今大会を開催するに当たり、準備委員会及び実行委員会で決定し、理事会への報告・議決を経る必要がない情報については、できるだけ早く各隊長に伝えることができるよう検討した。各隊長に情報を早く提供していくことで、参加するカブスカウト達が早めに準備できるように考えた結果であるが、県内に151団あることから、郵送などを利用すると経費がかかりすぎる点が問題となっていた。

2-2 当日の場内情報提供

今大会の会場は大変広く、貸し切り使用とすることができなかった。このため、公園全体に同じ情報が流れてしまう場内放送は利用することができず、参加者全てに当日の変更事項を伝える方法がなかった。これまでも、大会運営用として特定小電力無線機（いわゆるトランシーバー）を利用することはあったが、運営スタッフ及び各隊引率指導者全員に渡すだけの数をそろえることは難しく、情報共有は一部にとどまる形となっていた。

2-3 当日及び事後の広報

当日、参加しているカブスカウトの保護者や関係者、カブスカウト隊の指導者ではないことから参加していない他隊指導者などに対して、活動の報告をする必要があった。特に近年、ボーイスカウトの加盟員数は著しく減少^⑤しており、この大会をきっかけに、ボーイスカウトのPRをより進めていきたいとの考えもあった。

3. 情報通信機器を利用した情報共有

以上のような状況に対応するため、準備委員会で検討した結果、事前の情報提供及び当日・事後の広報のためにブログ^⑥によるホームページを利用し、当日の場内情報提供等のために、メーリングリスト^⑦を利用することとなった。これは①PCだけでなく、携帯電話でも利用できる、②インターネット上の既存サービスにより無料で利用できる、③IDとパスワードで管理されているため、やり方さえわかっているならば、複数人で管理が可能である、などの理由による。

3-1 ブログ

ボーイスカウト埼玉県連盟では公式WEBサイト^⑧を設置し、基本的な情報提供はこちらで行っている。この公式WEBサイトは、携帯電話による閲覧には対応していないため、これとは別に第8回埼玉カブラリー専用のブログサイト^⑨を設置し、情報の提供を行った。



図2 カブラリーブログサイト

a. 利用したシステム

今回のブログ設置については、シーサー株式会社による seesaa ブログ⁽¹⁰⁾を利用した。

これは別途筆者が利用していたこともあるが、seesaa ブログは携帯電話のメール機能を利用した記事掲載が可能であり、また、携帯電話のiモード等WEB閲覧機能による記事閲覧が可能であることから、多くの関係者に見てもらえる可能性があるかと想定したからであった。加えて、無料サービスとなっていることも採用した条件の一つとなっている。

b. リアルタイムの会議状況報告

ブログサイトは、前年9月の第1回準備委員会で設置が検討され、その日のうちに設置。準備委員名簿、第1回会議の議事録などが掲載された。その後、5回の準備委員会、3回の実行委員会、4月24日の隊長会議と、ほぼリアルタイムで状況の報告を行った。

ブログを利用した場合、いわゆるHTML文を使用することなく、テキストと画像を入力していただくだけで記事掲載が可能であることからサイト運営が比較的楽であり、頻繁な記事掲載が可能であった。

c. 参加者のニーズ吸い上げ

ブログを利用したことから、コメント機能により参加者からの意見の吸い上げが可能となった。ブログのコメント機能は匿名投稿も可能であるが内容も公開されるため、建設的な意見以外はあまり意味のないものとして捉えられてしまう。このため、匿名のコメントはなく、実際の運営に有益な意見が投稿された。

また、ブログの特性であるトラックバック機能⁽¹¹⁾により、県内ボーイスカウト関係者の設置したブログとの連携も可能となり、本大会に関する情報が県内各地のブログで紹介されるようになった。

d. 掲載された記事

掲載された記事の件数は71件。このうち、事前の打ち合わせに関するものが40件であった。また、リアルタイムで写真を掲載したほか、参加各団のリーダーが自分たちのサイトで紹介している写真にもリンクし、あわせて26件が当日の様子を紹介している。

3-2 メーリングリスト

メーリングリストは、平成17年3月16日に開設された。4月24日（日）に開催された隊長会議の前に設置され、ブログサイトを通じて、参加を呼びかけた。隊長会議の会場で説明したところ、20名以上の参加手続がその場で行われた。最終的に136人の参加者があり、98件の投稿が行われた。このうち37件は、事前に投稿されたもので、残りが当日以降に投稿されたものとなっている。

a. 利用したシステム

このメーリングリストには、GMOメディア株式会社⁽¹²⁾による「freeml」⁽¹³⁾を利用した。当初から携帯電話メールを利用することを前提としていたため、広告があまり入らないものとしたことから、このサービスが選ばれた。

b. 事前のメールのやりとり

5月15日以前には、37通のメールが投稿された。主にメーリングリスト参加に対する自己紹介などのあいさつであったが、実行委員会からの状況報告、周りの引率指導者への参加の勧誘の願いも行われた。

c. 当日のメールのやりとり

当日投稿された43件のうち、17件が大会主催者側からの情報提供及び質問に対する答えであった。当日は開会式前に雨が降っていたため、会場到着前の引率指導者から、会場の様子・気温等の問い合わせがあった。

また、会場が広がったこともあり、落とし物に関する問い合わせのメールが何件か投稿されると共に、それを見つけたという報告が別の引率指導者からあった。

さらに、開・閉会式を行った熊谷ドームで子どもが苦しんでいるとの連絡がメーリングリストに入り、それを見て救急班が駆けつけ手当をするという例もあった。

4. 野外活動における活用のポイントと課題

以上のような今回の事例から、野外活動において情報通信機器を使用していく際に考えられるいくつかのポイントと課題をあげてみたい。

4-1 「無線」であること

野外活動を行う際は、ケーブルをつなげたまま機器を持ち歩くことは、あまり現実的ではない。活動の範囲が限られることになるからである。

携帯電話の普及により、運営スタッフ・引率指導者の多くが携帯電話をもっていることから、すでに「線 (=ケーブル)」に活動の範囲を制限されることはないが、携帯電話の電波「圏外」に制限されてしまうことがある。今回の大会においては、幸い携帯電話各社のアクセスポイントが近かったのか、圏外になることはなかったが、事前に確認する必要があると思われる。

また、無線 LAN アクセスポイントの充実が見込まれる場所では、無線 LAN 機能を利用できるコンピュータの使用をすることができるため、より詳細な情報提供が可能となる。

4-2 電源の確保

情報通信機器はその使用に際し電源が必要となるが、このことは上記「無線」であることと相反する可能性を持つ。本来電源を確保するためには、ケーブルが必須となるからである。

しかし、今回利用した携帯電話においては、もともと小電力での使用が可能であることに加え、近年防災用などで開発された手回し充電器の普及により、ケーブルを使用しないで充電することが可能となった。今回は1日限りの大会であったため特に充電の必要はなかったが、数日間続くような大会の場合は、充電するための電源の確保が重要となってくる。

4-3 規模への対応

今回の大会は参加者が3,000人程度であったが、2006年夏、ボーイスカウト日本連盟は、全日本大会にあたる「第14回日本ジャンボリー」⁽¹⁴⁾を開催する。これは、22,000人が1週間キャンプする大会となるが、今回のように携帯電話によるインターネットツールを利用する場合、この規模の人数で果たして携帯電話が使用可能かと言う疑問があってもおかしくない。

たとえば、元旦の際、携帯電話の音声同時使用が一時的に増えることから、輻輳を回避するため音声に関して発信制限が行われる。これと同様に携帯メールについても制限がかかる可能性があるが、音声とパケット通信は別の回線を使用するため、パケット通信を利用する電子メールの場合は特に制限は行わないことが確認されている。10万人が被災者となった新潟県中越地震の際も、メールについては制限がかからないまま通信可能であった⁽¹⁵⁾。つまり、22,000人程度でも、携帯メールなら通信可能であるという推測ができ、野外活動というレベルでの規模への対応は可能であると思われる。

おわりに

携帯電話は、登山における遭難時の非常用連絡手段としての効果も見出され、北アルプスへの登山届けには携帯電話を書く欄がある⁽¹⁶⁾など、すでに実際にも利用されている。今回、あらためて野外活動における情報通信機器の利用について検討し、実際に使用してみたが、現在街中で実際に使われているよりももっと活用できる可能性を感じた。

特に今夏行われる日本ジャンボリーのように、規模が大きく長期間行われる大会においては、大会運営のための情報共有が重要であることは言うまでもないが、その共有の方法がいまだに前近代的な方法に頼らざるを得ない状況であることから、携帯電話の有効利用はその現状を打破する可能性を持っていると考察される。

また、大規模な野外活動における情報通信機器を利用する際のポイントが、いわゆる被災時の情報通信機器の利用に似ていると思われる点が多いことから、今後、被災時の訓練としてこのような大会を利用し、情報通信機器の被災時の利用についての実証実験などが可能なのではないか、という点も最後に指摘しておきたい。

〈注〉

- (1) ボーイスカウトに参加する青少年のうち、小学校3年生から5年生の部門。ボーイスカウトでは年齢にあわせプログラムの内容が異なり、カブスカウトのほかにビーバースカウト（小学1、2年生）、ボーイスカウト（小学校6年から中学3年生）、ベンチャースカウト（高校生年代～20歳）、ローバースカウト（大学生年代）と部門わけされている。
- (2) 熊谷スポーツ文化公園については、次の通り。<http://www.parks.or.jp/kumagaya/info/info.htm>
- (3) ボーイスカウト埼玉県連盟の加盟員数は平成17年3月31日の時点で11,188名。このうち、カブスカウトが2,424名、各隊の指導者があわせて2,545名となっている。また、団は151個団あり、ほぼそれぞれにカブスカウト隊がある。
- (4) 埼玉県連盟公式WEBサイト <http://www.scout-saitama.jp>
- (5) 平成15年から16年にかけて、日本全体で8千人以上、埼玉県連盟で220人以上減少している。各県連盟ごとの統計数値については下記が詳しい。http://www.scout.or.jp/j/commi/download/member_01.pdf
- (6) 携帯電話を利用したブログについては、次の論文で詳しく説明されている。

藤本孝一郎「ソフォモアセミナーにおける BLOG 活用」城西情報科学研究第 15 卷 (2005)

- (7) メーリングリストについては次のサイトが詳しい。 <http://www.kt.rim.or.jp/~atsato/ml/index.html>
- (8) ボーイスカウト埼玉県連盟公式 WEB サイト <http://www.scout-saitama.jp>
- (9) 第 8 回埼玉カブラリーブログサイト <http://8scr.seesaa.net/>
- (10) <http://blog.seesaa.jp/>
- (11) トラックバック (TrackBack) はブログの主要機能の一つで、ある他人の記事に対し、自身のブログにて言及したことを通知する機能、あるいはその行為のこと (フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より)。
- (12) <http://www.gmo-media.jp/about/index.html>
- (13) <http://www.freeml.com/>
- (14) 大会概要についてはこちらを参照されたい。 <http://www.scout.or.jp/14nj/index.html>
- (15) 2004 年 10 月 23 日に発生した新潟県中越地震に関連して、NTT ドコモでは音声については制限をかけたが、携帯メールについては制限をかけていない。中村功「中越地震と安否情報 — 災害用伝言サービス利用者インタビューから —」モバイル社会研究所 http://www.moba-ken.jp/core/core_03_5.html
- (16) 北アルプス岐阜県側情報 <http://www.kitaalpsgifu.jp/climbing.html>

参考文献

- 梅田望夫「ウェブ進化論—本当の大変化はこれからはじまる」筑摩書房 (2006)
- 江下雅之「ネットワーク社会の深層構造『薄口』の人間関係へ」中公新書 (2000)
- 可兒鈴一郎・羽倉弘之「ユビキタス時代のコミュニケーション術」清流出版 (2005)
- 林 進 編「コミュニケーション論」有斐閣 (2004)

(Received Feb. 28, 2006)